

## 綴方教育雑誌『鑑賞文選』に見る木村寿の位置

菅 邦男

(宮崎大学教育文化学部)

### 1、県央・県西部で盛んだった大正時代の綴り方教育

大正十四年(一九二五)六月、雑誌『読方綴方 鑑賞文選』が文園社から創刊された。学年別雑誌で、創刊時は尋常四年、尋常五年、尋常六年用の三種、八月に高等科用が加わって四種となった。翌大正十五年一月には他学年用も創刊され、高等科が一年・二年に分かれて計八冊の発行となる。昭和五年(一九三〇)九月には『綴方読本』(郷土社)と名を変え、翌年あたりから休刊・欠号が増えていく。その後、昭和八年六月に『新生綴方読本』、昭和九年三月に再び『綴方読本』となり、復刻版収録『鑑賞文選・綴方読本』関係年表によれば昭和十年五月の尋常四年用が現存する最終号で終刊の年月は不明となっている。途中『綴方読本』『新生綴方読本』と誌名を変えるが、ここでは『鑑賞文選』で統一する。

『鑑賞文選』は学年別雑誌で薄いということもあってか、定価は五銭である。『赤い鳥』の創刊時(大正七年)の定価が十八銭、大正十三年十二月には四十銭になっているのに比べると、相当の廉価と言える。そのためか、全国的にかなり読まれたようである。宮崎県でも入選・選外佳作その他の形で二十余の学校名を誌上にみることができる。

『鑑賞文選』に掲載された宮崎県関係の作品は、大正十五年三月号から昭和八年十一月号までで、詩三十六編、童謡二編、綴り方五十編、俳句十五編、短歌一編、笑い話一編、選外佳作詩四編、選外佳作童謡二編、選外佳作綴り方五編、その他六編である。

所属校は、学校名が明記してあるものが十九校、「宮崎県北諸県郡山田町」と町名は書かれているが校名がないもの一校、「宮崎」とのみ記してあり校名がないもの四作品(学校数は不明)、そのほかに他県校の誤記ではないかと思われるものが一校ある。

『鑑賞文選』に登場する宮崎県の学校を年代順に並べてみる。作品が最初に掲載されるのは、大正十五年の三月号である。

◇=県央県西部の学校 ◆=県北部の学校(以下同じ)

※大正十五年『鑑賞文選』(作品数は省く)

- 三月号 ◇西諸県郡野尻小学校(尋常四年:詩)
- 五月号 ◇西諸県郡高原小学校(高等二年:綴り方)
- 六月号 ◇西諸県郡野尻小学校(尋常五年:綴り方・俳句)
- 七月号 ◇宮崎県長浦小学校(他県校の誤記か。高等二年:綴り方)
- 九月号 ◇都城市都城女子小学校(尋常三年:綴り方)
- ◇西諸県郡小林小学校(高等一年:綴り方)
- ◇都城市大王小学校(高等二年:綴り方)

- 十月号 ◇都城女子小学校（尋常三年：綴り方）  
 ◇宮崎郡田野村鹿村野校（尋常六年：日記）  
 十二月号 ◇西諸県郡小林小学校（尋常五年：詩）

大正十五年の掲載校は、現在の西諸県郡、小林市、都城市、宮崎市の学校で、いずれも県央・県西部に位置する。宮崎郡田野村鹿村野小学校（現・宮崎市）を除いて、他は県西部の学校である。県北部で入選を果たしている学校は一枚もない。大正七年創刊の『赤い鳥』でも同じ傾向を示しており、全国誌に入選というレベルで言えば、大正時代は県央から県西にかけて綴り方教育が盛んで、県北はそうでもなかったことになる。

『赤い鳥』では大正八年二月号から子どもの童謡を募集するが、実際に作品が掲載されるのは同八年の四月号である。この時既に宮崎県から入選者を出している。これも現・都城市（県西部）の学校である。

『赤い鳥』に関係する学校（大正時代）は以下のとおりである。なお、作品名は省く。

※『赤い鳥』関係校（大正時代）

- 1, 大正八年四月 ◇中郷村梅北小学校（現・都城市）童謡 鎌田正直
- 2, 大正八年八月 ◇同 童謡 黒田大丈夫
- 3, 大正八年三月 ◇創作童話選外佳作 都城重君政敏、  
綴り方選外佳作 宮崎野田敏夫
- 4, 大正八年六月 ◇佐土原小学校訓導「井上呉水」の投稿（現・宮崎市）
- 5, 大正八年七月 綴り方選外佳作 宮崎秋山敏孝 同齋藤とよ子
- 6, 大正八年十月 ◇佐土原小学校訓導「井上呉水」の童謡掲載（現・宮崎市）  
少年自作童謡選外佳作 宮崎野崎浄禪
- 7, 大正九年一月 綴り方選外佳作 宮崎川野和夫
- 8, 大正九年十月 ◇綴り方入選 児湯郡美々津小学校尋三中塾棕（現・日向市）  
創作童話選外佳作 宮崎石川善石  
自作童謡選外佳作 宮崎寺町重志、宮崎清水次郎
- 9, 大正九年十二月 ◇高原小学校准訓導・押領司篤政 童謡入選（西諸県郡）
- 10, 大正十年四月 ◇高原小学校准訓導・押領司篤政  
「地方童謡」欄に、西諸地方の謡を投稿（西諸県郡）
- 11, 大正十年五月 綴り方選外佳作 宮崎大倉伸一
- 12, 大正十年六月 綴り方選外佳作 宮崎北出到
- 13, 大正十三年十二月 ◇綴り方選外佳作 宮崎杉田秀夫  
後の画家・瑛九（宮崎市）
- 14, 大正十四年二月 ◇綴り方選外佳作 宮崎杉田秀夫 （宮崎市）  
◇自由画選外佳作 宮崎松田秀夫 （宮崎市）
- 15, 大正十四年五月 自由画選外佳作 宮崎八木織江 同松本操
- 16, 大正十四年十一月 創作童話選外佳作 宮崎岩切佐久弥
- 17, 大正十五年三月 綴り方選外佳作 宮崎西島茂 同柴田堅太郎 同山田照夫

この中で学校名が明記されているのは、梅北小学校（1、2）、佐土原小学校（4、6）、美々津小学校（8）、高原小学校（9、10）の四校で、いずれも県央・県西部の学校である。美々津小学校は、現在、日向市立の学校で県北部に属する。しかし当時は「児湯郡」の学校であり、県央部に属していた。県央部の最北端に位置し、日向市との合併により県北部の最南端となったのである。

選外佳作はいずれも「宮崎」とあるのみで、それがどこを意味するかは分からない。大正十三、十四年に綴り方選外佳作になっている「宮崎杉田秀夫」とあるのは後の画家瑛九であり、宮崎市の学校に通っていた。「宮崎」とあるなかで明確なのは僅かにこれだけである。したがって、「宮崎」とある学校がすべて県央部の学校だったとは言い切れない。しかし少なくとも全国誌に入選するレベルで言えば、宮崎県の大正時代の綴り方教育は、県北よりも県央・県西部が中心だったと言える。

童謡入選を果たしている「井上呉水」（佐土原小学校）や押領司篤政（高原小学校）も、県央・県西部（宮崎市・西諸県郡）に属する学校の訓導である。高原小学校は『鑑賞文選』でも大正十五年五月号を皮切りに度々入選者を出しているが、押領司篤政が居た大正九年頃には既にそうした気運があったのだと思われる。それを支えていたのは若い教師たちだった。高原小学校の押領司篤政にしても、まだ准訓導である。

宮崎県で最初に入選を果たした西諸県郡野尻小学校の綴り方「みゝずの死」には担任のコメントが付いており、末尾に（受持新穂）と記されている。当時の生徒で『鑑賞文選』大正十五年七月号に俳句が入選した林松男氏は、「新穂先生は当時師範学校を出られたばかりで、すらりとした背の高い先生だった。後に養子に行かれた。」と話している。『宮崎大学教育文化学部同窓会名簿』には「大正十三年宮崎師範学校本科第一部卒業 谷口衡（新穂）」とあり、確かに宮崎師範出たての訓導だったことがわかる。林氏は、学校で『鑑賞文選』をとっていたと言っている。投稿する作品も、学校で書いた。若い新穂衡訓導は『鑑賞文選』をとり、子どもたちに綴り方や詩・俳句を指導していたのだ。

余談だが、林氏は入選した俳句「雨が降るさくらの花はぼんやりと」を今でも覚えていると言い、誦んじて見せた。「よく覚えていますね」と言うと、「きのんこた（昨日のことは）すぐ忘るっけど、子どもん頃のこた（ことは）よう覚えちよりますな」という答えが返ってきた。林松男氏は大正四年五月の生まれで、平成二十年段階で九十三歳である。

## 2、県北部南方小学校の登場

※昭和二年『鑑賞文選』

- 一月号 ◆東臼杵郡南方小学校（尋常一年：綴り方）
- 二月号 ◆東臼杵郡南方小学校（尋常一年：賞・綴り方、詩）  
校名不明（宮崎とあるのみ。尋常四年：選外佳作綴り方）  
校名不明（宮崎市とあるのみ。尋常五年：詩）
- 三月号 ◆東臼杵郡南方小学校（尋常一年：綴り方）

- 五月号 ◇西諸県郡野尻小学校（尋常五年：選外佳作謡）  
◇西諸県郡小林小学校（尋常六年：俳句）
- 七月号 ◆東臼杵郡南方小学校（尋常二年：綴り方）
- 八月号 ◆東臼杵郡南方小学校（尋常二年：綴り方）  
◇西諸県郡高原小学校（高等二年：俳句、笑話）  
◇西諸県郡小林小学校（高等二年：俳句）
- 九月号 ◆東臼杵郡南方小学校（尋常二年：賞・綴り方）  
◇西諸県郡高原小学校（高等二年：俳句）  
校名不明（宮崎とあるのみ。尋常六年：選外佳作綴り方）  
◇青島小学校（高等科：綴り方）
- 十月号 ◆東臼杵郡南方小学校（尋常二年：詩）  
◇西諸県郡高原小学校（高等二年：俳句、綴り方、詩）
- 十一月号 ◆西郷小学校（尋常四年：選外佳作綴り方）
- 十二月号 ◇西諸県郡高原小学校（高等二年：選外佳作綴り方）

昭和に入ると県北部の学校が登場する。昭和二年に、県央・県西部の学校に混じって東臼杵郡南方小学校（現・延岡市）・西郷小学校（現・美郷町）の県北二校の名が見える。西郷小学校は選外佳作一回だが、南方小学校は七回の入選を果たし、綴り方で二回の「賞」を獲得している。宮崎県で賞に入っているのは、南方小の二回、岡富小の一回だけである。

※昭和三年『鑑賞文選』

☆＝県南部の小学校

- 二月号 ◇西諸県郡高原校（高等科二年：短歌、選外佳作俳句）
- 三月号 ◇西諸県郡高原校（高等科二年：綴り方）  
☆南那珂郡大堂津小学校（尋常六年：綴り方、童謡）  
◆水清谷校（尋常六年：童謡）
- 五月号 不明校（高等科：俳句）
- 六月号 ◇西諸県郡高原校（高等科：選外佳作童謡）  
☆南那珂郡大堂津小学校（尋常六年：選外佳作綴り方）（高等科：童謡）  
不明校（高等科：選外佳作綴り方）
- 七月号 不明校（高等科：俳句）
- 十二月号 ◇西諸県郡高原校（尋常四年：選外佳作綴り方）

昭和三年の『鑑賞文選』では、入選を果たした県北の学校は水清谷小学校一校だけで、他はすべて県西・県南部の学校である。南那珂郡大堂津小学校は、県南部で『鑑賞文選』に載った唯一の学校である。

3、逆転した県央・県西と県北

※昭和四年『鑑賞文選』

- 一月号 ◇大王小学校（尋常二年：おたより、童謡）

- 三月号 ◇西諸県郡高原校（尋常三年：綴り方）  
◆門川小学校（尋常五年：選外佳作綴り方）
- 五月号 ◆門川小学校（尋常六年：綴り方）
- 七月号 ◆岡富小学校（尋常一年：綴り方）  
◇江平小学校（高等科：詩）
- 九月号 ◆岡富小学校（尋常一年：綴り方）
- 十二月号 ◆岡富小学校（尋常一年：綴り方）

昭和四年には門川小学校（東臼杵郡）、岡富小学校（現・延岡市）の県北二校が計五回入選しているのに対し、県央・県西の学校は大王小学校（都城市）高原小学校（西諸県郡）江平小学校（宮崎市）の三回だけで、校数では勝るものの、登場数は逆転している。

#### ※昭和五年『鑑賞文選』

- 一月号 ◆岡富小学校（尋常一年：綴り方、詩）
- 三月号 ◆岡富小学校（尋常一年：詩）  
◇綾小学校（尋常六年：綴り方）
- 四月号 ◆岡富小学校（尋常二年：綴り方）
- 五月号 ◇飯野小学校（尋常二年：綴り方、詩）  
◇北諸県郡山田町（尋常五年：綴り方）
- 六月号 ◆岡富小学校（尋常一年：綴り方、詩）
- 七月号 ◆岡富小学校（尋常二年：綴り方、詩）
- 八月号 ◆岡富小学校（尋常二年：詩）
- 九月号 ◆岡富小学校（尋常二年：綴り方、詩）
- 十月号 ◆岡富小学校（尋常二年：綴り方、詩）
- 十一月号 ◇宮崎第一小学校（尋常二年：詩）
- 十二月号 ◆岡富小学校（尋常二年：綴り方、詩）

昭和五年では、県北部の学校は岡富小学校（現・延岡市）だけだが、一校で九回の入選を果たしており、県央・県西の四校を圧倒している。

#### ※昭和六年『鑑賞文選』

- 一月号 ◆岡富小学校（尋常二年：綴り方）
- 二月号 ◆岡富小学校（尋常二年：詩）
- 三月号 ◆岡富小学校（尋常二年：綴り方、詩）
- 五月号 ◆岡富小学校（尋常三年：綴り方・賞）  
◇飯野小学校（尋常五年：綴り方 評中で触れられており入選ではない。）
- 六月号 ◆岡富小学校（尋常二年：綴り方）  
◆延岡小学校（尋常一年：綴り方）
- 七月号 ◆岡富小学校（尋常三年：詩、選外佳作詩）  
◆延岡小学校（尋常三年：綴り方）

九月号 ◆延岡小学校（尋常一年：綴り方）

昭和六年になると県央・県西部の学校は飯野小学校一校のみで、県北部の学校、特に六回入選の岡富小学校に続いて延岡小学校が三回入選しているのが目を引く。

※昭和七年『鑑賞文選』

六・七月号 ◆延岡小学校（尋常二年：綴り方）

十一月号 ◆延岡小学校（尋常一年：綴り方）

十二月号 ◆延岡小学校（尋常一年：綴り方）

昭和七年には、宮崎県からの入選は延岡小学校だけになる。それも入選三回という少なさである。

※昭和八年『鑑賞文選』

一月号 ◆土々呂小学校（尋常一年：綴り方、詩）

二月号 ◆土々呂小学校（尋常一年：綴り方、詩）

三月号 ◆土々呂小学校（尋常一年：詩）

六月号 ◆土々呂小学校（尋常一年：詩）

七月号 ◆岡富小学校（尋常一年：詩）

◆延岡小学校（尋常一年：詩）

十月号 ◆土々呂小学校（尋常二年：詩）

十一月号 ◆土々呂小学校（尋常二年：綴り方、詩）

昭和八年は土々呂小学校、岡富小学校、延岡小学校と県北部の学校ばかりで、県央・県西部の校名は見あたらない。

#### 4、まとめ～逆転の意味

『鑑賞文選』掲載校の流れをまとめると、大正時代が県央・県西の学校のみ、昭和二年に県北の二校が登場し、特に南方小学校は七回の入選を果たしているが、昭和三年には再び県北は一校のみとなっている。昭和四年から県央・県西と県北の逆転が見られ、昭和五年には県北の岡富小学校が、昭和六年には岡富・延岡両小学校が県央・県西を圧倒している。昭和七・八年には県央・県西の学校は姿を消す。昭和七・八年に至って、大正時代とはまったく逆の現象が起きたことになる。これは何を意味するのだろうか。

県北の学校が『鑑賞文選』で入選するきっかけを作った東臼杵郡南方小学校の指導者は、木村寿である。木村は大正十四年三月三十一日に南方小学校に赴任し、初めて一年生を受け持った。豊かな自然に囲まれながらそのことに何の認識もない子どもたちを目にし「自然観察の綴り方」を始めるのだが、その成果が昭和二年の入選となって現れたのである。

ではなぜ、昭和三年には南方小学校が姿を消し、県北の学校はふるわなかったのか。

それは木村寿が転勤になったからである。昭和二年九月三十日付けで、木村は東臼杵郡岡富尋常高等小学校に移っている。岡富小学校での指導の成果は昭和四年七月号から『鑑

賞文選』誌上に現れる。綴り方十五編、詩十五編を入選させ、他に選外佳作・詩三編等がある。

参考までに、岡富小学校の入選作品を挙げてみる。

※岡富小学校（現・延岡市）『鑑賞文選』

昭和四年	七月号	尋常一年	綴方「サクランボ」	稲葉徳幸	
	九月号	尋常一年	綴方「サヲ ノ ツユ」	眞武静丸	
	十二月号	尋常一年	綴方「十五ヤ」	本母宣子	
昭和五年	一月号	尋常一年	綴方「メリイサン」	本母宣子	
	一月号	尋常一年	詩「ニハトリ」	渡邊 通	
	三月号	尋常一年	詩「ジドウシヤノアト」	眞武静丸	
	四月号	尋常二年	綴方「ウメノ花」	稲葉徳幸	
	六月号	尋常一年	綴方「ヤカン」	眞武静丸	
	六月号	尋常一年	詩「ヒカウキ」	臼井壽雄	
	六月号	尋常二年	詩「まつの木」	臼井壽雄	
	六月号	尋常二年	綴方「さくら見」	臼井壽雄	
	七月号	尋常二年	詩「あめふり」	眞武静丸	
	七月号	尋常二年	綴方「うさぎ」	臼井壽雄	
	八月号	尋常二年	詩「すべりだい」	眞武静丸	
	九月号	尋常二年	綴方「あまだれ」	渡部 通	
	九月号	尋常二年	詩「ほたる」	臼井壽雄	
	十月号	尋常二年	綴方「木のゑ」(文の研究)	池田良雄	
	十月号	尋常二年	詩「田の中」	本母宣子	
	十月号	尋常二年	綴方「お月さん」	臼井壽雄	
	(こんげつ、つづりかたの、よくできてゐた人。紹介のみ)				
昭和六年	十二月号	尋常二年	綴方「日の出」	眞武静丸	
	十二月号	尋常二年	詩「十五や」	本母宣子	
	一月号	尋常二年	綴方「すいつちよん」	小島政雄	
	二月号	尋常二年	詩「きしやなんご」 (ごっこ)	眞武静丸	
	二月号	尋常二年	詩「山」	眞武静丸	
	二月号	尋常二年	詩「すゞめとかがし」	井上正信	
	三月号	尋常二年	詩「あぜ道」	杉山信一郎	
	三月号	尋常二年	綴方「かがみ」	井上正信	
	五月号	尋常三年	綴方「ごんまり(賞)」	本母宣子	
	六月号	尋常二年	綴方「ねらみごっこ」	小島政雄	
	七月号	尋常三年	詩「とう番」	小野宮子	
	昭和八年	七月号	尋常一年	選外佳作詩「せんば鳥」	井上正信
				選外佳作詩「えんしう」	岡田泉
				選外佳作詩「かねこり」	柳田つな子
		七月号	尋常一年	詩「ヒカウキ」(再録)	臼井壽雄

ほぼ毎月の入選と言って良い。特に、昭和五年六年は独壇場の観がある。昭和六年の六月号、七月号、九月号に延岡小学校の名が見えるが、七月号は尋常三年生の作品なので別の指導者の可能性が高いものの、他の「尋常一年生の綴り方」はすべて木村寿の指導である。木村は昭和六年三月三十一日付けで東臼杵郡延岡尋常小学校に転勤になり、一年生を受け持った。昭和六年の飯野小学校は入選ではなく評の中に児童の名が出て来るだけなので、この年の入選作はほとんど木村寿の指導作品（岡富小・延岡小）で占められていたことになる。

昭和七年も同様で、すべて延岡小学校の作品である。掲載回数が三回（綴り方五編）と少ないのは、一年で転勤になったからである。

木村寿は昭和七年三月三十一日に東臼杵郡土々呂尋常高等小学校に赴任している。昭和八年に岡富・延岡小と共に土々呂小学校が『鑑賞文選』誌上に登場するのはそのためである。この年の岡富小と延岡小の作品は再録で木村寿の指導作品であるから、昭和八年は土々呂小学校の作品のみが入選し、掲載されたのはすべて木村寿の指導作品だったことになる。掲載作品が綴り方四編、詩十編とやや少ないのは、木村が昭和七年頃に千葉春雄を知り、『綴り方倶楽部』等に投稿するようになったのが原因と思われる。

むろんその後県央・県西において綴り方教育が消滅してしまっただけではない。昭和十年前後の『綴り方倶楽部』にも、僅かながら県央の作品が掲載されている。

次に『綴り方倶楽部』昭和八年六月号から昭和十三年五月号に作品が掲載された宮崎県の校名を挙げてみる。ただし、『綴り方倶楽部』は現在散逸しており、全号を見ることができたわけではない。

※『綴り方倶楽部』 昭和八年六月号～昭和十三年五月号（閲覧できた号に限る）

- |           |       |            |          |         |
|-----------|-------|------------|----------|---------|
| ◆東臼杵郡土々呂小 | 詩十八編  | 綴り方九編      | 木村寿の文章五編 | 木村寿指導   |
| ◆東臼杵郡美々地小 | 詩二編   | 綴り方一編      | 詩佳作一編    | 養部哲三指導  |
| ◆西臼杵郡鞍岡小  | 詩一編   |            |          | 山崎梅夫指導  |
| ◆西臼杵郡高千穂小 | 詩佳作二編 | 綴り方一編      |          | 今村梅夫指導  |
| ◆東臼杵郡平岩小  | 詩四編   |            |          | 養部哲三指導  |
| ◆北諸県郡北郷小  | 綴方一編  | 今村十三郎の文章一編 |          | 今村十三郎指導 |
| ◇宮崎郡瓜生野小  | 詩一編   |            |          | 阿萬祥吉指導  |
| ◇宮崎市第六宮崎小 | 詩佳作   | 一編         |          | 椎葉重人指導  |

県央からは宮崎郡瓜生野小学校、宮崎市第六宮崎小学校（現・江平小学校）が入選しており、綴り方教育が持続していたことが分かる。しかし学校数、入選作品数から言っても県北優位は動かない。

このように、『鑑賞文選』においては木村寿の登場とともに県央・県西から県北へと綴り方教育の中心が動いていく観があるのだが、同様のことは『赤い鳥』についても言える。

昭和に入って『赤い鳥』誌上に初めて入選作が載るのが昭和三年三月である。「第二十卷第三号」に東郷小学校の五年生高森通夫の詩「あの人」が掲載されている。以後『赤い鳥』に登場するのは、東郷小学校、草川小学校、土々呂小学校の三校で、いずれも県北の学校である。



こうして見てくると、『鑑賞文選』も『赤い鳥』も、初期は県央・県西の学校が中心だったが、木村寿の登場（昭和二年）とともに県北へ中心が移り、昭和六年頃からは完全に逆転して県北が中心になっていったことが分かる。木村の存在は、県央・県西から県北へという綴り方教育の流れをもたらしたのである。

県北での木村寿の影響は、いくつかの事例から明らかである。昭和八年に北郷小学校で『カガヤキ』という文集を出していた今村十三郎は師範時代の同窓で友人。『綴り方倶楽部』にも執筆した今村は転勤先の方財小学校では綴り方教育から手を引き、ついには教師を辞めてしまう。木村はそんな方財小時代の今村に、再度『カガヤキ』に匹敵する文集を出すように促している。

・また高千穂町上野小学校で文集『芽』を出していた佐藤実（弟さんの話）は木村寿を尊敬していた。その師範時代の同窓だった山崎（今村）梅夫は鞍岡小学校で綴り方教育をやっていたが、木村寿宅を訪ねて論議するなど交流があった。『赤い鳥』で活躍した草川小学校の訓導平田宗俊は、転勤先の川南小学校で、研究会に木村寿を講師として今村梅夫と共に招いている。こうしたつながりが、県北の綴り方教育を押し上げていったのだろう。

木村寿は鹿児島島の磯長武雄を初めとして、九州や鳥取（「国・語・人」同人）など県外の綴り方教師たちとも交流があり、文集の交換をしていた。また中央の小砂丘忠義、千葉春雄、百田宗治等の知己も得ていた。何度か中央の講習会等にも出かけている。そうした意味でも、木村は宮崎県では突出していた。

木村寿の存在は、県北の綴り方教育にとって、また宮崎県の綴り方教育にとって、極めて大きいものであった。

#### 【注】

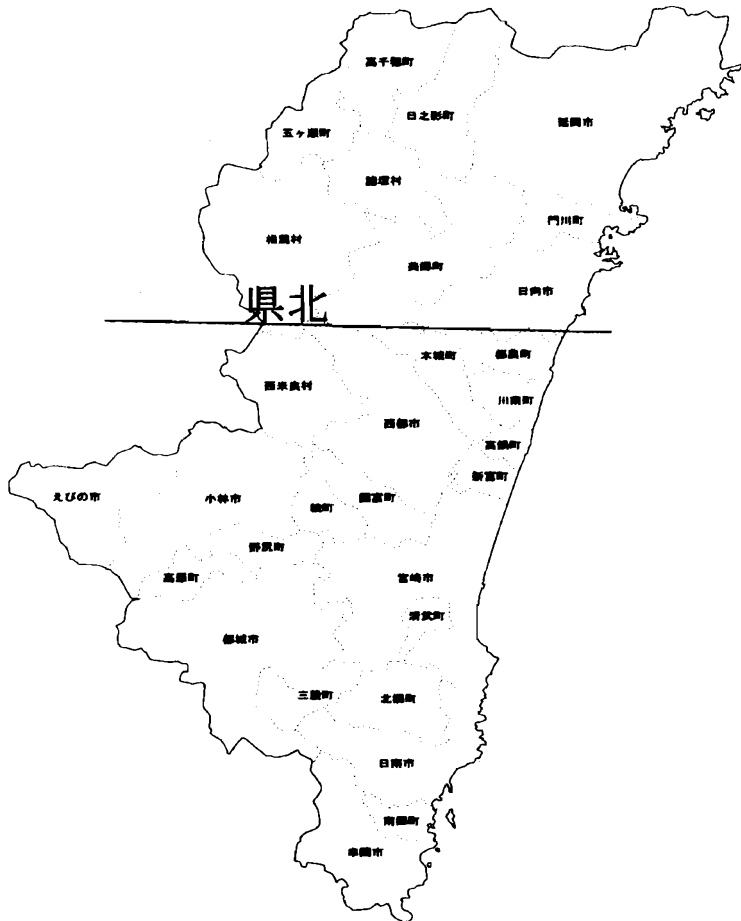
木村寿 大正九年三月宮崎県師範学校男子第一部卒業。同九年四月一日東臼杵郡北川尋常高等小学校訓導となる。大正十四年三月に赴任した東臼杵郡南方尋常高等小学校で初めて一年生を受け持ち、綴り方教育を始める。以後綴り方教育に邁進するが、土々呂小学校時代（昭和七年～九年）に出した一年から三年生までの学級文章『ヒカリ』『ひかり』『光』によって全国的にその名を知られた。

なお、『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』（第11号 H16・9～第18号 H20・3）に拙論「宮崎県の生活綴り方教師・木村寿」を連載している。本稿はその一環として執筆したものである。

#### 【参考文献】

- ・中内俊夫監修『復刻 読方綴り・鑑賞文選』復刻版 全16巻・別巻1 H19・9 緑蔭書房
- ・菅邦男「宮崎県における『赤い鳥・児童自由詩』の展開」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第9号 H15・9
- ・菅邦男「宮崎県における児童生活詩の展開（一）－昭和戦前期の綴り方教師－」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第10号 H16・3
- ・菅邦男「宮崎県における児童生活詩の展開（二）－昭和戦前期の綴り方教師－」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第11号 H16・9

- ・菅邦男「宮崎県の生活綴方教師・木村寿～南方小・岡富小・延岡小～」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第11号 H16・9
- ・菅邦男「宮崎県の生活綴方教師・木村寿（二）～土々呂小学校学級文集『光』」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第12号 H17・3
- ・菅邦男「宮崎県の生活綴方教師・木村寿（三）～土々呂の詩～」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第12号 H17・3
- ・菅邦男「宮崎県の生活綴方教師・木村寿（四）～文集『光』における『調べる綴方』の展開」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第13号 H17・9
- ・菅邦男「宮崎県の生活綴方教師・木村寿（五）～文集『光』における童話指導」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第14号H18・3
- ・菅邦男「宮崎県の生活綴方教師・木村寿（六）～井伏鱒二の「かぼん調べ」評をめぐって」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第14号 H18・3
- ・菅邦男「宮崎県の生活綴方教師・木村寿（七）～文集『光』の終焉」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第17号 H19・9
- ・菅邦男「宮崎県の生活綴方教師・木村寿（八）～児童詩教育における童謡の位置」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』第18号 H20・3



図：宮崎県関係地図